

土地改良に携わる技術者として

中国四国農政局 農村振興部設計課 事業調整室 ● まなべ 直子



自己紹介

私は瀬戸内海に面した漁村の出身で、祖父は漁師、両親は会社員という家庭で育ちました。住んでいた地域に水田はほとんどなく、通学路に家庭菜園規模の小さな畑が所々にあったのを覚えています。農業とはほとんど縁のない環境で過ごしました。

そんな私が土地改良の分野に出会ったのは、ご主人が測量の仕事をしているという知人から、測量士の資格が取得できる農業工学科への進学を勧められたのがきっかけでした。今振り返っても、きわめて単純な動機でしたが、30年後に土地改良に深く関わる現在の自分の状況を、当時は私のみならず周囲の誰しもが想像もしていませんでした。

現場で生きる技術力

入省して間もない頃、当時の上司から「農業土木は経験職だ。現場経験を積んでこそ、技術力が磨かれる。」と教えられました。この言葉は、現在に至るまで、私の指針となっています。



現場対応の様子

私には強く印象に残っている出来事があります。今から20年ほど前の、ため池工事の担当をしていたときのことです。台風による豪雨のなか、受注者からの緊急連絡を受けて現場へ向かうと、流域からの流入水により急上昇した池の水が、堤体を越水する寸前となっており、決壊の危機的状況にありました。現場では大型土のうによる堤体の嵩上げが進められていましたが、先輩技術者は即座に洪水吐側壁の取り壊しを指示しました。さらに、隣接する民家の家主の了解を得たうえで庭木を伐採し、ロープで束ねバックホウのアームに結び、堤体に沿わせるように水中に投入させました。濁流による堤体浸食を防止するための措置でした。

洪水吐を取り壊した直後から池の水位は速やかに低下していきました。流下能力を大きく超えて放水したため、直下流の農地の一部は水没したものの、結果としてため池決壊という最悪の事態は回避され、被害を最小限に食い止めることができました。

少しでも判断が遅れると甚大な被害につながる可能性がある中で求められる究極の判断。それは培ってきた経験と豊富な知識に裏付けされた技術力が発揮された瞬間でした。

それ以来、経験こそが自分の成長に繋がる。その信念をもって、与えられた業務に取り組むようになりました。

細かい話になりますが、現場の仕上げにも技術力の差が表れると感じています。標準断面どおりに施工できない端部の擦り付けなどは、しばしば現場で問題になります。経験の浅い頃は、施工業者から相談されても仕上がりイメージできず、逆に、提案を受けるば

かりでしたが、経験を重ねるにつれて、仕上がりをイメージしながら議論できるようになり、自分なりの成長を感じています。現場の端部の仕上がりには、携わった技術者の技術力とキラリと光るセンスが垣間見えます。

ワークライフバランス

私が入省した当時は、職場全体に占める女性の技術者は少なく、関係機関や地元など、行く先々で珍しがられていました。当時の私は女性であることで特別視されないよう、どこかで気負っていた部分があったように思います。

私が入省した年に男女共同参画社会基本法が公布・施行されました。基本法に沿って様々な制度が創設・拡充され、また、共同参画やワークライフバランスに対する社会の認識や理解が進んできました。また、近年の働き方改革によりテレワークやフレックス勤務など勤務形態がより柔軟になり、男女問わず個人の家庭状況に合わせて仕事と家庭を両立しながら働き続けられる職場環境が整ってきていると感じています。

私は、長男18歳（大1）、次男15歳（高1）、長女13歳（中2）の3児の母親業をやりながら業務に従事していますが、これまで出産・育児期においては保育時間や短時間勤務など、その時々で活用できる各種制度を駆使して仕事を続けることができました。また、フレックス勤務やテレワークを活用し、週末だけ家族のいる自宅に帰るというスタイルで、3年間の単身赴任も経験させてもらいました。平日の家事等、生活面でのサポートの一切を家族に委ねる状況で、子供達にはかなり負担をかけることとなりましたが、職場の理解と協力、そして何より家族のサポートのおかげで3年間を乗り切ることができたと思っています。

これからの土地改良について

近年、土地改良に従事する技術者は減少傾向にあります。また、農業農村工学を体系的に学ぶことの



広報活動

できる教育機関が少なくなっていることもあり、新たな人材確保が難しい状況となっています。さらに、技術者の減少に伴い、一人にかかる負担が増え、現場経験や技術の継承の機会が少なくなるなど、技術力の低下も懸念されるところです。

土地改良は単なる土木工学ではなく、地域に根差す「農業」が根底にあり、食料を生み出す基盤づくりを通じて地域の農業を支え、私たちの「食」につながる重要な役割を担っています。そういった土地改良の意義ややりがい、魅力を広く発信し、若者を中心に多くの人に興味・関心を持ってもらうことで、これからの人材確保につなげていくことが大切だと感じています。

併せて、現場経験の機会を確保し、技術を着実に継承していけるよう、人材育成にも取り組むことで、将来にわたって土地改良を持続的に発展させていく必要があると思っています。

土地改良に携わる技術者として、土地改良の発展に貢献できるよう、今後も多様な経験を積み重ねながら技術力の向上に努めていきたいと思っています。

眞鍋さんからのバトンをしっかりと受け取りました。次号では、化学を専攻して土木分野へ飛び込んだ経験をもとに、現場や技術開発に携わる中で感じたことや考えるようになったこと、女性技術者の立場から見た建設業の変化、そしてこれからの建設業への想いをお伝えします。

株式会社本間組
土木事業本部
土木企画部 土木企画課

すずき あつこ
鈴木 敦子

